

ひろまれ念仏

vol.12 (ver3.0)

2020年 10月 発行
山中温泉 白鳳凰山 恩栄寺



ごあいさつ

浄土真宗の開祖・親鸞かいそ しんらんしやうにん聖人のご命日をご縁として、親鸞聖人しやうがいにのご生涯と、私たちに遺のこしてくださったお念仏のみ教えに出遇であわせていただく「報恩講」が、今年も勤まります。

世の中がガラリと一変したこの1年でしたが、変わらなければいけないこともあれば、変わらず続けていくべき大切なこともあります。「報恩講」もその一つです。

とは言え、まだまだコロナの収束は見えません。お互いに感染予防に気をつけながら、今年の「報恩講」にお参りをいただけたらと思います。

◆報恩講のご案内◆

●日 時●

1 11月1日 (日) 午後2時 (和敬仏教婦人の集い)

2 日 (月) 午前10時

午後1時30分 (敬老の集い)

※コロナウイルス対策のため、マスク着用やアルコール消毒、換気などにご協力をお願いいたします。

●ご講師●

11月1日

みなみで こうじゅ
南出香樹 師

11月2日

おくだ じゅんせい
奥田順誓 師

どうぞお参りください。恩栄寺

報恩講の変更点について

新型コロナウイルスの流行を考慮し、本年度の報恩講は例年といくつか異なる部分があります。すので、お知らせをいたします。まず、例年お付き合いをしております加賀市のお寺さまとのお参り合いを、今年には行わないこととなりました。

また、お参りの日程も、夜のお座と、三日のお参りを取りやめ、また例年、二日のお昼に皆さまにお出ししておりました「お齋とぎ」も、万が一のことを考えまして、今年中止とさせていただきます。今年はお参りを楽しみにされていた方も多いかと思いますが、ご理解の程、よろしくお願いいたします。

最も大切な「報恩講」を縮小するのは大変、心苦しいところではあります。今年一年の我慢がまんと信じて、このような形でお勤ととめをさせていただきたいと思えます。皆さまも、くれぐれも感染予防にご協力をいただきますようお願いいたします。



ほっこり法話

「虹を見る、月を見る」 日下賢裕

先日、久しぶりにご本山に行く機会がありました。会合の場で、いろんなお坊さんとお話をしましたが、ある先輩のお坊さんが、こんなお話をしてくださいました。

「ある朝早く散歩していると、空にこれまで見たことないくらい美しい虹がかかっていました。あまりの美しさに感動したので、思わずその感動を誰かと共有したくなったのですが、早朝なので回りには誰もいない。それでも暫く歩くと、掃除をしている人がいて、いてもたってもいられず、『おはようございます』と声をかけました。するとその掃除をしている人は突然知らない人から声をかけられたことに驚いていましたが、その虹のことを話すと『教えてくれてありがとうございます！』ととても喜んでくれました。その人は、下を向いて掃除をしていたので、虹が出ていることに全く気づいていなかったようです。私もその人が虹に感動してくれて、とても嬉しい気持ちになりました」

確かに、どんなに美しい虹が出ていても、下を向いたままで、空を見上げようとしなければ、気づかないまま、ということとはよくよくあることでしょう。

このことをよく表しているのが、法然聖人が詠まれた有名な詩です。

「月影のいたらぬ里はなけれども

眺むる人の心にぞすむ」

この詩は、月の光の届かない人里などないけれど、その光は眺めてみて初めて、その人の心に至り届く、ということを言い表しています。そして月は阿弥陀仏という仏さまのはたらき、「南無阿弥陀仏」を喩えたものだとされています。



私たちは、普段生活していると、ついつい視野が狭くなってしまうというか、狭い価値観でしか物を見れなくなってしまうように思います。仕事のこと、子育てのこと、人間関係のこと、勉強のこと。私たちの日常は、いろんな悩みごとや、やらなければならぬことが目の前に満ち溢れていて、そこから目を離してみるということはなかなかできません。

けれど法然聖人の詩にあるように、視野が強張ってしまいがちな私たちの視線をほんの少し変えてくれるのが仏教であり、また「仏事を勤める」という行いではないでしょうか。お参りをするを通して、普段の生活の中ではなかなか気づかないことに思いを向けることに繋がっていく。つまり、自分のいのちについて考える場でもあり、死を想う場でもあり、そして、亡くなった人、大切な人との縁であったり、その人のはたらきが実は今も届いているということを感じるための時間・空間なのです。

「報恩講」という法要もまた、それと同じ意義があります。私たちにすでに届いている、阿弥陀仏という仏さまのはたらき「南無阿弥陀仏」があることを、親鸞聖人のご生涯を振り返る中に、気づかせていただく。そしてそこから、この私の姿であったり、私の「いのち」の向かう先についてを聞かせていただくための大切なご縁です。

コロナ禍で、これまで以上に困難な日々が続いておりますが、そんな苦悩の中にあるこの私を照らす「南無阿弥陀仏」のはたらきに、共々に出遇わせていただきたいと思いますね。



涅槃に至る道「八正道」について。正しいものの見方「正見」、正しく判断する「正思惟」、正しい言葉を使う「正語」に続いて今回は「正業」です。

「正業」とは、一言で言うならば「正しい行動」をする、ということ。私たちは日頃、いろんな行いをして生活をしています。寝る、食べる、座る、移動する、仕事をする、買い物をする。挙げればきりが無いほど、私たちの行為は多岐にわたります。「正業」とはそれらの行動を、正しいものにしていきましよう、という教えです。

もう少し具体的にすると、命を殺めないこと、他人のものを盗まないこと、不倫などの不義理をしないことなどが言われます。

これは「五戒」のという五つの戒めの中にも出てくる「不殺生・不偷盗・不邪淫」に当てはまるものです。これらのことを避けるというのが、まず「正業」ということの基本になります。

さらにもう少し理解を広げていきますと、他者を傷つけない行動を心がける、他者を思いやる行動を心がける、ということになるでしょう。前回『仏説無量寿経』という言葉があることを紹介しましたが、「愛語」というのは「正語」に通じるものですが、「和顔」とつまり優しい笑顔で人と接するものというの「正業」に通じるものと言えるでしょう。

他にも「無財の七施」と呼ばれる



るものでは、優しい眼差しで人と接する「眼施」、おだやかな顔つきをもって人に対する「和顔施」、優しい言葉をかける「言辞施」、人を手伝う「身施」、人の心を思い量る「心施」、席や場所を譲る「床座施」、心落ち着ける場を与える「房舎施」という誰でもできる布施の行いが示されていますが、こちら「正業」の一つの例として参考になるものかと思えます。

仏教では、私たちの行為というものには「身口意の三業」と言われるように、心と言葉と身体とは密接に関係し合うと考えます。ですからこの「八正道」でも心で思う行為を正しくする「正思惟」、言葉を用いる行為を正しくする「正語」、そして身体を用いる行為を正す「正業」と三つに分けて示されています。ですから実際に言葉や行動を起こさなくても、心で「人を傷つけない」と思うだけでも、それは「正しい行い」とは言えないということになります。

心も言葉も、そして行動も。この三つを調べていくということが仏教における「正しい行い」とさられていくのです。

編集後記

住職となって初めてお迎えする「報恩講」が、まさか例年とは違う形になるとは思ってもみませんでした。本当に「有為転変」、なにが起こるかわからないのが、この私たちの真実だったと気づかされます。しかしこんな時だからこそ、仏法を確かな依り所としていきたいものですね。